

人とかがわる

不思議！風船から声が聞こえたよ

社会福祉法人謝徳会 るんびに一保育園（愛知県岡崎市） [3、4歳]

<きっかけ>

バルーンアートを見て風船に興味をもった子どもたちは、上にはね上げたり友達とキャッチボールをしたりなど、風船遊びを楽しむ。4歳A児が偶然、風船に口をあてて、「あ〜」と言ったところ風船がピリピリしていることに気づき、驚いた表情で話すと、B児や3歳児C児もやり始める。すると今度は、B児がA児の風船に耳をあてる。「うわあー、声が聞こえる！」と言うB児を見て、周りにいた他児もやり始める。



事例1 風船をくっ付けてみよう

「これ聞こえるのかな？」と、ワクワクしている3歳C児に、4歳D児が「聞こえるんじゃない？」と言うと、C児は風船に耳をあてる。D児は風船に口を当て、「あいうえお〜」と言うと、C児は「あっ、聞こえたよ」と、驚きの表情をする。D児が「ほんとに？交代して！」と言うと、今度はD児が風船に耳をあて、C児が風船に口をあてて話す。

4歳B児：「どんどん風船増やしてみようよ！」と、近くで見て提案する。

4歳D児：「やろうやろう！」近くにいた子どもたちが集まり、風船を3個、4個と増やしていく。

4歳C児：「4つでも聞こえたね。ねえ！みんなできっ付けてやってみない？」

子どもたち：「やってみよう！！」と14人が集まる。

横に1列に並び、風船をくっ付けようとするが、耳をくっ付けて聞こうとすると風船がずれて離れてしまい、上手にくっ付けることができない。

4歳E児：「このままバラバラでやってみようよ」

子どもたち：「そうだね、やってみるか！」

4歳F児が風船に口をあて、他の子どもたちは耳をあてる。

4歳F児：「いくよ！リ・ン・ゴ」と小さな声で言う。

子どもたち：「うわっ！！」「声聞こえたよ！！」「今「リンゴ」って言ったよね！！」



事例2 風船電話をやってみよう

青文字 = 科学する心に迫る体験

子どもたちは、るんびに一文庫から“風船電話”や“糸電話”が載っている本を見つける。見たことのない“不思議な電話”に興味をもって遊び始める。

初めての体験に心を躍らせ、声が聞こえると、「うわあ〜、聞こえるよ！」と驚く。

“風船電話”の糸をどんどん伸ばして遊ぶが、6m30cmに達した時に声が聞こえなくなる。子どもたちは「何で聞こえないの？」という疑問をもつ。

その時“糸電話”を思い出した4歳G児から「“糸電話”は聞こえるのかな？やってみたいな」という意見が出て、周りの子どもも「やりたい！」と、強い思いを表す。糸電話の糸の長さは、“風船電話”が聞こえなくなった6m30cmからやってみる。どんどん伸ばした結果、子どもたちの耳では、10mまで声が聞こえる。自分たちで積極的に“糸電話”遊びを、糸の長さを変えながら展開していく姿が見られる。上手に糸を張れない3歳児に対して、「こうやってしっかり持つんだよ」「ピーンと張った方がいいよ」と手を添える4歳児の自然な優しい姿も見られた。

糸を伸ばしていく中で、子どもたちから自然に「“風船電話”と“糸電話”、何が違うのかな？」「どうして紙コップの方がよく聞こえるのかな？」という疑問が生まれ、紙コップから聞こえる音を探る。

コップの底を取り除き試した結果、「よく聞こえるよ！」の声に、ドキドキしながら見ていた子どもたちの表情がパッと明るくなり、クラス全体で「やった！！」「やっぱりそうだったんだ！！」という感動を共感する。

子どもたちの発想から、考え、工夫し、試していく過程で、楽しさや学びの心、喜びや達成感・満足感を味わうことができた。



ポイント

風船から不思議な声が聞こえるという体験に素材の魅力も加わり、子どもたちが意欲的に遊びを展開しています。子どもたちはこの遊びで「科学する心」に迫る体験をすることにより、“人とかがわる”力も育まれています。気づきも疑問も、疑問の解消も人とのかわりによって深まり、確かな学びになっていきます。